

新見公立大学紀要 第34巻
pp. 79–83, 2013

研究ノート

在宅看護実習における居宅介護支援事業所での学生の学び —在宅看護実習記録「看護職としての視点」の分析から—

丸山 純子*・栗本 一美

新見公立大学看護学部

(2013年11月13日受理)

本研究は、今後の在宅看護実習の効果的な教育の検討資料とすることを目的に、居宅介護支援事業所での実習終了後に学生が記述した在宅看護実習記録の「看護職としての視点」の学びの分析を行った。内容分析の結果、看護職の学びの視点として、293コードより、【看護職としての専門的支援】、【療養者と家族の尊重と精神的支援】、【他機関・他職種との連携】、【介護支援専門員の役割】、【地域での支えあい】、【社会保険制度の理解】の6カテゴリと23サブカテゴリが抽出された。

居宅介護支援事業所での実習において、地域で生活する療養者と家族を対象とした看護職としての専門的支援の実態や、精神的支援、他職種理解と連携、介護保険制度などについて学びを深めていくための効果的な指導が必要であることが明らかにされた。

(キーワード) 在宅看護実習, 居宅介護支援事業所, 学生の学び

はじめに

1997年に看護基礎教育過程のカリキュラムに新設された在宅看護論は、地域で生活しながら療養する人々とその家族を理解し、在宅での看護実践の基礎を学ぶ内容とされ、2009年度教育カリキュラム改正で統合分野に位置づけられた¹⁾。

本学では「在宅で療養生活を送る療養者と家族(対象)を理解し、対象者の健康保持増進・疾病予防及びQOLを向上した生活の維持拡大、自立へ向けての看護活動を通して、地域の保健医療福祉体制における看護が展開できる能力と態度を養うこと」を目的に在宅看護実習を行っている。そして、在宅看護実習の一環に福祉の視点から在宅療養者と家族を理解するために居宅介護支援事業所での実習を取り入れている。

掛屋らの報告によると、居宅介護支援事業所での実習において「ケアマネの役割」や「介護保険制度」などについて学生は理解することができていた。一方で、看護職として誰とどのような連携をとるべきかを考え実践につながるように専門的知識を高め、提供できる能力の育成に結び付ける指導が必要であると述べている²⁾。

今回、本学における在宅看護実習の効果的な教育指導の検討資料とするために、居宅介護支援事業所での実習終了後に学生が記述した「在宅看護実習記録」中にある『看護職としての視点』の項目に記載されている内容を分析した。その結果、今後の教育課題が明らかになったので報

告する。

I. 研究方法

1. 調査対象：本学看護学部看護学科に在籍する4年生で、平成25年度に在宅看護実習を終了した64名のうち、本研究に同意した59名の記録用紙59枚。
2. データ収集期間：平成24年10月～平成25年7月
3. 調査方法：実習終了後に学生が提出した在宅看護実習記録内にある『看護職としての視点』の項目に記載している内容をデータとして取り扱った。データの分析方法は、内容分析の手法を用いて分析した。記載されている内容を、一文一意味として切り取り、内容をコード化し抽出し、一文章を1記録単位とした。次に個々の記録単位を類似性に沿ってカテゴリ化し、検討した。導き出したカテゴリ、サブカテゴリについては、スーパーバイズを受け、信頼性と妥当性の確保に努めた。

II. 倫理的配慮

学生に研究の目的、方法や匿名性の保持について、研究への協力は自由意思であり、研究に同意後も撤回可能であること、また研究の協力の有無は成績と無関係であ

*連絡先：丸山純子 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

ることを口頭および文書にて説明した。説明後、同意書に記入することで協力を得た。

Ⅲ. 居宅介護支援事業所実習の概要

1. 実習目的

在宅療養者と家族への支援活動の実際を通して、地域ケアシステムのあり方を理解するとともに、在宅福祉における看護者の役割を理解する。

2. 実習目標

- 1) 各施設の機能・役割が理解できる。
- 2) 在宅療養者と家族の生活環境を知るとともに、健康・生活上の問題に対して支援の必要性が理解できる。
- 3) 家族の役割が分かり、介護上の悩みなどが理解できる。
- 4) 在宅療養者と家族の状況に応じた支援の実際が理解できる。
- 5) 介護支援専門員の役割が理解できる。
- 6) 在宅療養者を支援するために地域ケアシステムの実際が理解できる。

3. 実習内容

在宅看護実習は、2週間を1クールとし、診療所・訪問看護ステーション・居宅介護支援事業所・障害者地域活動支援センターの4か所で1～2日ずつ実習を行う。

居宅介護支援事業所での実習は、学生1～2名で介護支援専門員に同行し、居宅機能、ケアマネの役割と活動内容などについて学ぶ。

Ⅳ. 結果

居宅介護支援事業所での実習記録内の『看護職としての視点』から抽出された記録単位数は293コードであった。それを基に分析した結果、学びのカテゴリーは、【看護職としての専門的支援】、【療養者と家族の尊重と精神的支援】、【他機関・他職種との連携】、【介護支援専門員の役割】、【地域での支えあい】、【社会保険制度の理解】の6カテゴリーと23のサブカテゴリーに分類できた。

カテゴリー、サブカテゴリーの構成を表1に示し、抽出されたカテゴリーと実習目標の関連を図1に示した。

以下の文中においてカテゴリーは【 】, サブカテゴリーは(), コードは< >として表記する。

Ⅴ. 考察

居宅介護支援事業所での実習における『看護師としての視点』として、最もコード数が多かったカテゴリーは【看護職としての専門的支援】であった。学生は介護支

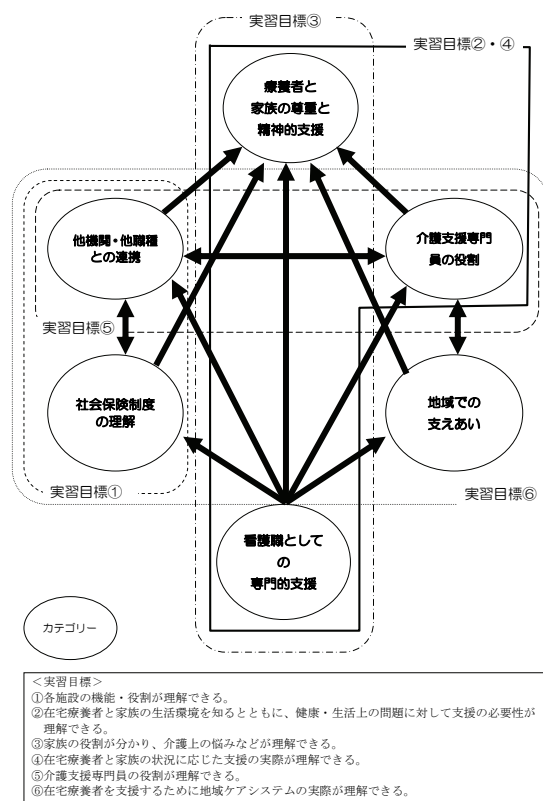


図1 実習目標とカテゴリーの関連図

援専門員と同行した訪問先での療養環境を見て、＜内服管理や指導、症状の経過観察を行い、疾患を抱えながらも生活していけるよう介入していく必要がある＞、＜その家族の健康管理も大切だと思った＞との記述から、看護師として療養者や家族に対しての服薬指導や食事療法など（看護職としての指導・教育的関わり）を行いながら、（療養者と家族の健康管理）の必要性を学んでいる。そして、家族の生活にも着目しながら情報収集することは、療養者の健康状態や生活上のアセスメントを行う際に重要であることを学んでいる。これらは、＜利用者のニーズの把握やアセスメントを行うことなど看護展開と似ている部分もある＞との記述がみられることから、看護の基本となる（観察の重要性）、（情報収集の重要性）、（アセスメントの重要性）といった看護過程の展開を応用している場面だと考える。

学生は、これらの観察とアセスメントから、（看護職としての技術的支援）として、＜Spo2や医療機器（チューブ）などの管理も大切＞と感じていることや、＜より専門的な医療面での支援が必要＞と在宅医療に関する具体的な課題を予測し、在宅酸素や呼吸器などの医療機器に関する専門的看護技術の提供と療養者と家族への専門的指導・教育の重要性を学んでいる。そして、施設内看護と同様に、在宅においても看護の基本となるアセスメント能力等の基礎看護技術と、健康管理のための専門的指

導・教育方法を学ぶ必要性を表していると考えられる。

この学びは、実習目標②『在宅療養者と家族の生活環境を知るとともに、健康・生活上の問題に対して支援の必要性が理解できる。』と、実習目標③『家族の役割が分かり、介護上の悩みなどが理解できる。』実習目標④の『在宅療養者と家族の状況に応じた支援の実践が理解できる。』に関連していると思われる。

【療養者と家族の尊重と精神的支援】としては、＜居宅という場では病院以上に家族の存在が大きなものになるのだと実感した＞との記述から、療養者だけでなく、（療養者と家族の精神的支援）の重要性を学んでいる。そして、＜本人の頑張りを受け、プライドが傷つかないようにといった配慮＞や＜それぞれの利用者さんに対する看護ニーズに合わせた個別性のある介入＞など、きめ細やかな対応を行うことで（療養者の意思・個別性を尊重）することが、＜その人のQOLを考えた関わりをしていきたいと思った＞と（療養者と家族の生活を尊重）することに繋がると学んでいる。

また、＜ご本人とご家族の意向に沿った支援ができるようにしっかり傾聴＞するなどの（傾聴）についての学びも見られ、＜介護支援専門員と療養者、家族の方とはとても強い信頼関係で結ばれていた＞と（信頼関係の大切さ）や＜介護者や家族の相談に乗ることが大切だと思った＞と（相談）できる関係性にも着目している。

富安らは、学生は在宅看護実習の様々な事例に直接触れる体験を通して、家族介護者の役割をとらえる視点が広がると述べている³⁾。このことは、生活環境や既往歴が異なる療養者それぞれの生活を尊重しながらも、その家族介護者に対する身体的・精神的支援も必要となってくる在宅看護の特徴であると考えられる。そのためにも、療養者の疾患にだけ目を向けるのではなく、療養者と家族介護者を含め1単位の家族として捉え、訴えを傾聴しながら療養者と家族介護者のQOLを幅広い視野で捉えることができるコミュニケーションスキルの学びも必要と考える。

この学びは、実習目標②『在宅療養者と家族の生活環境を知るとともに、健康・生活上の問題に対して支援の必要性が理解できる。』、実習目標③『家族の役割が分かり、介護上の悩みなどが理解できる。』、実習目標④の『在宅療養者と家族の状況に応じた支援の実践が理解できる。』に関連しているものと考えられる。

【他機関・他職種との連携】としては、居宅介護支援事業所での実習では、介護支援専門員との同行訪問の他、担当者会議や地域ケア会議などにも出席する機会を得ている。学生の多くはこの時に初めて、1人の療養者に関わっている介護支援専門員以外の医師や保健師、福祉用具貸与業者や介護施設などの関係職種の多様さに気が付き、＜利用者を支えていくためには、看護師だけでなく

他職種との連携が欠かせない＞、＜施設・病院の連携が大切である＞と（他職種との連携）、（他機関との連携）の必要性を実感している。そして、＜それぞれの専門職としての視点から利用者に関わりを持ち、他職種との情報交換を行うことで新たな観点から利用者に触れることができるのではないかと考えた＞と、他職種との（情報の共有）をすることで、療養者によりよいサービスを提供することの重要性を学んでいる。

その中でも＜ケアマネと頻回に連絡を取る＞、＜連携しているケアマネに報告し、ケアしていく必要がある＞との記述から、看護職として（介護支援専門員との連携）の重要性を強く感じている。

さらに、＜病院と在宅をつなげることが看護師の重要な役割の一つだと考えられた＞、＜サービスについてきちんと理解しておかないと安心できる退院後の在宅療養につなげることにはできない＞との記述もあり、入院時から退院後の生活を念頭においた支援の必要性についても学ぶことができ、療養者に関わる継続的な（継続看護体制）についても視野が広がったと考える。

これらは、実習目標①『各施設の機能・役割が理解できる。』と実習目標⑤『介護支援専門員の役割が理解できる。』、実習目標⑥『在宅療養者を支援するために地域ケアシステムの実践が理解できる。』に関連するものと考えられる。しかし、学生によっては会議に参加できなかったりすることで関連職種の記載に差がみられたため、今後の課題として検討していく必要がある。

【介護支援専門員の役割】としては、＜ケアマネは身体的・精神的・社会的なことを考慮しながらサービスを見直すことが大切＞と、（ケアプランの検討）の重要性や、＜介護支援専門員という立場の人がいるからこそ、知識のない一般の方も過不足ない看護・介護を受けられる環境を得られるのだと思った＞と、（サービス調整）について学んでいる。そして、＜療養者は家がいいと言われても現実的な問題として家族が介護を行うことには困難さがあり、療養者の願いだけを受け止めるわけにはいかないということ学んだ＞のように、療養者と家族の意見の違いがあることを知り、現状の解決困難な課題にも直面する学生もいたことが分かる。

学生は他にも実際に様々な療養環境を目にし、住宅の改修場所等を見学することで、＜トイレ使用時にベッド周囲の状況も観察し危険回避する＞視点や＜片麻痺の転倒回避のため、段差や絨毯に気を付ける＞、＜転倒などの二次的な怪我がないように注意、予防することができると考えた＞など転倒予防対策として、具体的な（療養環境の整備）の必要性を学んでいる。

在宅復帰時には、入院や加齢による身体機能の低下や認知機能の低下によって、転倒の危険のリスクが上がることから、介護支援専門員やリハビリスタッフの協力の

もと、住宅改修などの退院に向けた支援や介入を早期から行うことが重要である。安心できる在宅の療養環境整備は、療養者の残存能力を十分に発揮させ、療養者のQOLの拡大につながると共に、家族の介護負担を軽減することに繋がる。

この学びは実習目標②『在宅療養者と家族の生活環境を知るとともに、健康・生活上の問題に対して支援の必要性が理解できる。』、実習目標④の『在宅療養者と家族の状況に応じた支援の実践が理解できる。』と実習目標⑤『介護支援専門員の役割が理解できる。』、実習目標⑥『在宅療養者を支援するために地域ケアシステムの実践が理解できる。』に関連している。

【地域での支えあい】としては、＜在宅で過ごされている方を地域の人々が協力し合って支えていくことが大切であると身を持って感じた＞、＜医療機関だけでなく、地域の周りの人々に支えてもらうことも本人の健康を守ることができる＞と、療養者が生活者として長年暮らしてきた地域における役割を理解し、（地域での支えあい）が、在宅療養において重要となることを学生は認識している。そして、＜その地域の生活観や地域の状態を把握することがまずは大切＞、＜地域性を理解した上で個別のケアが提供できるのだと学んだ＞と記述しているように、在宅医療に関わる看護職が、（地域性の理解）について関心を持ち、その地域の持つ力を活かして、保健・医療・福祉をつないでいくことが望まれる。

この学びは、実習目標⑥『在宅療養者を支援するために地域ケアシステムの実践が理解できる。』に関連している。

【社会保険制度の理解】としては＜看護師も介護保険の内容をきちんと把握しておかないと円滑にいかなくなってしまうと思った＞、＜福祉についての知識が必要である＞と、看護職としても（社会保険制度の理解）が必須であることを学んでいる。

この学びは、実習目標①『各施設の機能・役割が理解できる。』と実習目標⑥『在宅療養者を支援するために地域ケアシステムの実践が理解できる。』に関連しているが、変化する制度内容や他職種連携についてなど、より具体的に学ぶ必要があると考える。

渡部は、病院と在宅での看護の違いについては、在宅ケアには予防的観点があること、生活の維持、安全な環境、楽しみ、体力保持を挙げている⁴⁾。小児から高齢者まで対象となる在宅看護では、幅広い知識と看護の専門的技術支援、教育支援が重要であり、地域社会で暮らす療養者と家族の生活を尊重した関わりが必要である。

今回、居宅介護支援事業所における『看護職としての視点』で明らかになった学生の学びでは、在宅看護の実習目標に関連した視点で捉えることが出来ていた。

在宅看護における看護職の役割として保健・医療・福祉をつないでいくためには、介護保険制度や介護支援専

門員の役割について理解し、他職種連携に必要となる能力や、地域社会で暮らす療養者と家族の生活を尊重する関わりについての学びを深めていく必要がある。

本研究は在宅看護実習終了後の記録の一部分を抽出したものであり、記録状況も学生個々で異なることから、学生が学んだ全てのことが記載されているとはいいがたい。今後も、居宅介護支援事業所の機能と職種、地域の特性や家族との関わりを理解するため、現在学内実習で取り組んでいるディスカッションによる学びの共有を継続して行い、さらに学生の学びが深まるように支援していきたい。

文献

- 1) 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書, 厚生労働省医政局看護課, 2007-4-16,
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>, 2013.9.1 アクセス
- 2) 掛屋純子, 栗本一美: 居宅介護支援事業所実習での看護学生の学び—地域看護学実習記録用紙の分析から—, 第38回地域看護, 159-161, 2007.
- 3) 富安眞理, 鈴木みちえ, 長澤久美子他: 在宅看護論における家族支援に関する学習効果の検討, 一学生の家族支援の認識に焦点をあてて—, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 15, 35-43, 2007.
- 4) 渡部良子, 船越利代子: 在宅看護論実習における学生の学び—「訪問看護ステーションの実習を通して学んだこと」のレポートの分析から—筑波国際短期大学紀要, 35, 141-156, 2007.

表1 「看護職としての視点」の内容 () コード数 n=293

カテゴリ	サブカテゴリ	看護職としての視点・コード
看護職としての専門的支援	看護職としての指導・教育的関わり (36)	利用者の疾患の重症度や今後予測される合併症なども考え情報提供ができるのではないかと考えた 看護職として内服管理や指導、症状の経過観察を行い疾患を抱えながらも生活していけるよう介入していく必要があると感じた
	観察の重要性 (21)	バイタルチェックを行う 検査値や測定値に異常はないか、全身状態の観察も大切である
	情報収集の重要性 (21)	療養者や家族の生活状況や健康状態を把握することが重要 対象者の生活に目を向け、住環境や家族との関係、内的変化をしっかりと把握しなければならない
	アセスメントの重要性 (19)	健康状態や生活上の問題をアセスメントする 利用者のニーズの把握やアセスメントを行うことなど看護展開と似ている部分もある
	看護職としての技術的支援 (11)	SPO2値や医療機器（チューブ）などの管理も大切 高カリウム血症のある方への薬物療法や食事療法など治療の面でもっとしっかりした支援が必要
	療養者と家族の健康管理 (6)	その家族の健康管理も大切だと感じた 家族の方の身体面について考えることが今後の課題だと思った
	療養者と家族の精神的支援 (21)	本人とその家族の生活状況、身体的精神的な面からのアプローチをしていくことが大切 居宅という場では病院以上に家族の存在が大きなものになるのだと実感した。
療養者と家族の尊重と精神的支援	療養者の意思・個性を尊重 (15)	本人の意思を尊重しながら日常生活を営むためのサービスを広い視野で提供しなければならない 患者の頑張りや認め、プライドが傷つかないようにといった配慮
	療養者と家族の生活を尊重 (13)	情報提供は大切だが、押し付けはせず、今の状態を維持改善するために考えることが大切 その人のQOLを考えた関わりをしていきたいと思った
	傾聴 (7)	心身の健康に関することを最も理解できる立場だと思うので、何か気になることはないか傾聴などができると思った ご本人とご家族の意向に沿った支援ができるようにしっかり傾聴
	信頼関係の大切さ (6)	コミュニケーションによる信頼関係は大切 介護支援専門員と療養者、家族の方はとても強い信頼関係で結ばれていた
	相談 (2)	介護が無理と言われた場合に、介護者や家族の相談にのることが大切だと思った 看護師が相談役になることがその方たちの生活を支えることとなる
	他職種との連携 (29)	ケアマネをはじめとした他職種との連携をはかり、どのような役割をもって行動しているのかを理解する 利用者を支えていくためには、看護師だけでなく他職種との連携が欠かせない
	介護支援専門員との連携 (12)	連携しているケアマネに報告し、ケアしていく必要がある ケアマネと頻回に連絡をとることが必要がある
他機関・他職種との連携	他機関との連携 (10)	多くの事業所と連携をとることが必要 施設・病院の連携が大切である
	継続看護体制 (9)	療養者への継続看護を行っていかなければならない 病院と在宅をつなげることが看護師の重要な役割のひとつだと考えられた
	情報の共有 (6)	それぞれの専門職としての視点から利用者に関わりを持ち、他職種と情報交換を行うことで新たな観点から利用者に触れることができるのではないかと考えた 自分の情報だけにせず、他の専門職者と情報を共有し、よりよいサービスを提供するよう心がけたい
介護支援専門員の役割	ケアプランの検討 (13)	ケアマネさんが患者さんの様子をくみとって立ててくださるケアプランが非常に重要 ケアマネは身体的・精神的・社会的なことを考慮しながらサービスを見直すことが大切
	サービス調整 (4)	介護支援専門員という立場の人がいるからこそ、知識のない一般の方も過不足ない看護・介護を受けられる環境を得られるのだと思った 介護や看護の土台を調整する役割であると感じた
	療養環境の整備 (19)	居室の環境など、安全面への配慮 対象者の生活に目を向け、住環境をしっかりと把握しなければならない 転倒などの二次的な怪我がないように注意、予防することができると思った 片麻痺の転倒の危険回避のため、段差や絨毯に気をつける
地域での支えあい	地域での支えあい (5)	医療機関だけでなく、地域の周りの人々に支えてもらうことも本人の健康を守ることができる 在宅で過ごされている方を地域の方が協力し合って支えていくことが大切であると身をもって感じた
	地域性の理解 (4)	地域性を理解したうえで個別的ケアが提供できるのだと学んだ その地域の生活感、地域の状態を把握することがまずは大切であると思う
	社会保険制度の理解 (4)	福祉についての知識が必要である 看護師も介護保険の内容をきちんと把握しておかないと円滑にいかなくなってしまうと思った

